

## 教科横断型単元開発のための教材研究

—社会科と英語科の CLIL 単元のための論文読解—

沖西 啓子・西原 美幸・深澤 清治・池野 範男

本共同研究の目的は、学校教師が、専門科学（研究）者が行う研究を教材研究として読み解き、その読み解きから一人の研究者の「学習」過程を読み取り、授業づくりに応用する、論文読解から学習構造への変換システムを開発することにある。

本稿では、小学校における教科横断型単元を開発するために、社会科と英語科が協働して進める CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）単元を事例に取り上げる。社会科と英語科の教員がフロイド＝シュモアの活動を共通事例に、それぞれの教科授業を構想し、協働した単元を作るために、共通の教材研究として用いた論文（著書）読解を研究対象とした。ここではシュモアに学ぶ会編『ヒロシマの家—フロイド＝シュモアと仲間たち—』の読解から、専門科学（研究）者の「真正な学び」を学習者の学びへと変換する過程と、その構造を解明した。そのうえで、小学校社会科・英語科が協働する CLIL 単元を開発し、その開発過程を説明した。この教材研究から CLIL 単元作りへの過程をどのように進めたのかを明らかにすることを通して、教科横断型単元開発における、著書読解、その教材研究、単元づくりという教師の学びのプロセスを明らかにした。

明らかにした点は、次の3点である。

- (1) 小学校段階においても、またその教科横断型単元開発でも、論文（著書）読解による研究者の学びの構造理解は教材研究—単元づくりの過程に有効に活用することができる。
- (2) 小学校段階では、単元づくりにおいて、論文（著書）読解で見いだした研究者の学びの構造は応用・活用できるが、発達段階、学習環境に応じて別のもので変えた方がよい場合がある。教科横断型単元では2つの教科における学習双方に有効な材料を見いだすことが戦略上、大切である。
- (3) 教材研究としての論文（著書）読解において重要なことは、
  - 1) その論文（著書）の構成に示されている構造の発見である。
  - 2) その構造が示す中心観念である。そして、その中心観念が単元づくりの中心に活用できるかどうかを検討することである。
  - 3) 小学校の教材研究と単元づくりでは、発達段階や子どもの学習における適切性である。

キーワード：著書読解、真正な学び、研究者の学習、協働的教材研究

### **A Study of Teaching Materials for Cross-curricular Lesson Planning in an Elementary School:**

Reading Academic Research for CLIL Materials Development to Connect Social Studies and English Classes

Keiko Okinishi, Miyuki Nishihara, Seiji Fukazawa and Norio Ikeno

The purpose of this collaborative study is to design a transformation system in which school teachers read academic literature as a way of materials study; they learn a researcher's learning process by reading his/her research articles/books; and they apply their findings to lesson planning. In particular, the present study focuses on a lesson for Content and Language Integrated Learning (CLIL) collaboratively developed by social studies and English teachers in order to carry out cross-curricular lesson planning at the elementary school level.

First, a social studies teacher and an English teacher individually planned a lesson based on the activities by Floyd Wilfred Schmoe as a common case and later studied a book about his work as a common ground for collaborative materials development. Here they read the book about Schmoe's Houses for Hiroshima Projects and learned the process and structure of how to turn professional researchers' learning to learners' learning. Then the authors developed a CLIL lesson together and showed its design process. This materials development study shows the process of CLIL lesson planning and by doing so, it showed a teachers' learning process in cross-curricular lesson planning ranging from reading articles/books, materials study, and lesson planning.

There are three findings from this study:

- (1) Understanding the structure of researchers' learning process can be utilized in the process of materials study and lesson planning in cross-curricular lesson planning in the elementary school.
- (2) Although it is possible to apply and use the structure of researchers' learning found in their articles/books, findings should be adapted to the children's developmental stages and learning environment. It is important to make sure that the developed cross-curricular lesson should provide effective materials to both subjects.
- (3) Important things in reading articles/books as materials study are:
  - 1) to identify the structure of the target articles/books
  - 2) to identify the key concepts of the resource materials and see if those concepts can be used as a core in lesson planning
  - 3) to consider if the developed materials/lessons are appropriate for children in elementary school

Keywords : Reading Academic Literature, Authentic Learning, Learning by a Researcher, Collaborative Study of Teaching Materials

## 1. 本稿の目的と対象著書

本共同研究の目的は、専門科学（研究）者の論文の読解を教材研究に結び付けるために、論文の読解で見出す研究者の「真正な学び」を、教材研究に重要な、学習者の「学び」へと変換する過程とその構造を解明することである。

本稿は、その事例として、小学校で行われた社会科と英語科が協働してすすめる教科横断型単元、CLIL（Content and Language Integrated Learning：内容言語統合型学習）単元を取り上げる。

広島大学附属小学校は、2014年度より研究開発指定校として、小学校教育課程の開発に取り組んでいる。その開発は、グローバルリーダーとしての人材育成をめざすことを基本目標にし、1年より英語科を、また、1・2年の生活科に代わり、低学年社会科・理科を導入していることが特徴である。

各教科・領域が学校の基本目標に貢献するように見直し、たとえば、社会科では、家庭、学校、地域など子どもたちが生活する場所における国際化、グローバル化を取り上げ、世界のグローバル化だけではなく、身近な生活におけるグローバル化を学び、取り組むカリキュラムを作ろうとしている。

その一環として、他教科と協働することによって、グローバル化の理解を重層的に進めている。その1つが、英語科との協働であり、教科横断型単元の開発である。

教科横断型単元では、2つ以上の教科が協力し合い、学校の基本目標を共有しつつ、各教科の異なった目標を実現するために、教科間の連携により、学習がより充実できるように工夫する。

今回行ったものは、第4学年における社会科と英語科との教科横断型単元の開発である。社会科における「地域の発展に尽くした人々」の単元において、シュモーを取り上げることにより、戦後の復興におけるアメリカ人の貢

献が理解できるとともに、平和への実践を進めたシュモーの平和の考えを学ぶことができる。そして、シュモーがアメリカ人であるとともに、平和=peaceへの強い思いがあらこちらに残されており、英語科による平和の学習と結びつけることで、相乗効果が期待される。

このような単元開発の意図の下、社会科教員の沖西と英語科教員の西原が協力し合い、単元開発に臨んだ。二人は、共同研究者の池野と深澤の支援を得て、2つの教科の単元が並行して進む教科横断型単元に仕上げた。

本稿は教科横断型単元を開発する過程で、中心的な教材研究として、両教員が行った著書の読解から教材研究、そして単元案づくりへどのようにして至ったのかを自己分析し、本共同研究の課題となっている教材研究における論文（本稿では、著書）読解過程の分析とその結果の活用としての単元案づくりを説明しようとするものである。

対象とする著書は、シュモーに学ぶ会編（2014）『ヒロシマの家—フロイド＝シュモーと仲間たち—』（以下、本書とする）であり、本書の読解を手がかりとして、本稿の目的を目指す。

学校の教師は授業を行う前に、その単元の教材研究をする。しかし、その教材研究は論文や著書から学び、そのまま、あるいは、一部を切り取って教授することが多かったのではないか。つまり、専門科学（研究）者の研究過程やその構造を学ぶという観点が欠如していたのではないだろうか。

このような問題意識のもと、本書の構造を読み解き、その著書の研究の構造を発見して、シュモーを学習材にした単元づくりをした。

以下、教材研究において取り上げた本書の読解をどのようにしたのかを2章で説明し、3章で社会科授業開発を、4章で英語科授業開発をそれぞれ述べ、最後の5章で、教科横断型単元開発における教材研究における論文

読解とその特質, また論文読解から教材研究, 単元開発へのプロセスにおける論文読解の活用を検討して, 教科横断型単元開発における論文読解(協働的読解)について総括することにした。

## 2. 論文の読解

まず, 本書がどのように構成されているのか示しておこう。

はじめに

- 1 シアトルのサダコ像
  - ①腕を折られたサダコ像
  - ②サダコ像とシュモーさん
- 2 フロイド・シュモーさん
  - ①良心的兵役拒否を貫く
  - ②少数者での視点を持つ
  - ③一九四五年八月六日 原爆投下
  - ④大戦後, 個人の立場で広島に行く決意
  - ⑤実践的に平和活動をする
- 3 「ヒロシマの家」建設
  - ①一九四九年 アメリカからやってきた人々
  - ②ともに「ヒロシマの家」をつくった人々
  - ③「祈平和」
  - ④コウコ, ユウゾウの話
  - ⑤「ヒロシマの家」完成
- 4 「ヒロシマの家」から「シュモーハウス」へ
  - ①「ヒロシマの家」に住んだ人々
  - ②「コミュニティ・ハウス」に集った人々
  - ③ただ一つ残った「ヒロシマの家」
- 5 人類愛を貫く生涯
  - ①長崎から中東へ
  - ②敬愛と称賛
- 6 広がり続けるシュモー精神
  - ①シュモーさんに続く人々
  - ②新たな広がり
  - ③私たちも学び続けたい

発刊によせて

おわりに

本書は, アメリカの森林学者フロイド＝シュモーの半生についてまとめられたものである。本書は, 1-6章と, はじめに, 発刊によせて, おわりにの3つの部分, 全体で9つの部分から構成されている。

本書の作者らは, 2004(平成16)年, シュモーさんの「ヒロシマの家」を語りつぐ会(現シュモーに学ぶ会)を発足し, 数少ないシュモーの足跡をたどることにした。書物や当時の新聞記事, 資料等を探し出し, シュモーと共に活動した人物にインタビューをした。それらをまとめたものが本書である。

これまで, シュモーについての文献, 写真, 映像などの資料は大変少なく, 知られているとは到底言えない。その理由は, 彼が広島にやってきたのが第二次世界大戦後の復興まっただ中であつたこと, 彼の活動がボランティアであつたことなどを挙げることができる。そのために, 彼の活動に共感し, 彼の思いを引き継ごうとしている「シュモーに学ぶ会」が, 彼に関する文献や写真, 新聞記事を集め, 彼とともに活動した人々へのインタビューなどを行い, まとめたのである。

まず本書は, 社会科で活用するのを念頭において読解することにする。読解にあたって, 社会科の学習材として教材研究する場合の手順に従い, 読み進めていくことにした。

次に文章を読み解いた後, 本書の構造を把握し, 最後に著者の意図やこれまでの研究との差異を読み取るという三つの段階で進めた。

### (1) 本書の文章的読解

多くの教師が論文や著書を読む場合, 論文名や著書名, 章立て, 概要, 各章各節の順に読んでいることが多いだろう。そのため, それぞれを文として読むところから始めた。

文章的読解とは, まずタイトルや章の題目に着目し, その章の文章を要約する。次に,

要約を答えとする主要な問いを見い出す。最後にその著書・論文の章の順に、問いと答えを配列する。この読解の順に、本書の読解を進めた。

まずは、タイトルである。本書から、次のような問いが立てられるであろう。

- Q 1 フロイド＝シュモーとはどのような人なのか。
- Q 2 ヒロシマの家とはどのようなものか。
- Q 3 シュモーとヒロシマの家、これら二つはどのような関係があるのか。

このような問いが立てられるが、何が書いてあるのかを問いながら読解をしていけば、このような問いは読後に生み出されるだろう。

次に、各章の読み方である。各章の文章を要約し、それに基づき問いを見い出すこととする。

1 は「シアトルのサダコ像」と題されている。シアトル市のワシントン州立大学に近い市有地にあるピース・パークには、千羽鶴を折って自らの病気の回復を願った佐々木禎子さんの等身大の像がある。2003年、サダコ像の腕が何者かによって切り落とされる事件が起こった(p.6)が、すぐに修復のための募金運動が展開された。

1の主要な問いは、シアトルにあるサダコ像とはどのようなものなのか、である。

2は「フロイド・シュモーさん」と題されている。このタイトルから立てられる問いは、シュモーさんとはどんな人か、というものである。シュモーが広島に来るまでの活動や、シュモーの、戦争や平和に対する思いなどが書かれている。「平和とは『言う』ことではない。『行う』ことである」を信条とした(p.19)彼の活動が紹介されている。

2の主要な問いはシュモーとはどのような人物なのだろうか、というものである。

3のタイトルは「『ヒロシマの家』建設」で

ある。この章も、タイトルから、ヒロシマの家とはどのようなものか、という問いが浮かぶ。戦後の広島にやってきて「ヒロシマの家」を建設したシュモーと、シュモーの思いに共感し、協力した国内外の人たちが、家を作るとともに、「ヒロシマの家」の建設という形で平和への強い思いを表現したことが述べられている。

3の主要な問いは、シュモーはどのような思いでヒロシマの家を建設したのだろうか、である。

4のタイトルは「『ヒロシマの家』から『シュモーハウス』へ」である。シュモーは、原爆投下後の広島に家を建設しただけでなく、住民同士がお互いに交流を深められるように「コミュニティ・ハウス」を敢えて建設した(p.82)。「コミュニティ・ハウス」はやがて「シュモー住宅会館」、「シュモー会館」と名前を変え、現在の「シュモーハウス」になっている。シュモーが建設した現存する唯一の建物である。

4の主要な問いは、「ヒロシマの家」から「シュモーハウス」へとどのように変わったのだろうか、である。

5のタイトルは「人類愛を貫く生涯」である。ヒロシマの家を建設したシュモーは、長崎や朝鮮(朝鮮戦争休戦後)、エジプト(第二次中東戦争)にも行き、住宅の建設、道路や灌漑設備の修復、無料の診療所の設置、難民の支援などを行った(p.98)。1983年、88歳の時に広島市特別名誉市民の称号を受けた。また1988年、93歳の時に谷本清平和賞を受賞し、その時の賞金すべてを「シアトル・ピース・パーク」の建設費用に充てている(p.107)。彼は2001年4月20日に105歳の生涯を閉じた(p.110)。

5の主要な問いは、シュモーは、どのような生涯を送ったのだろうか、である。

6は「広がり続けるシュモー精神」である。2012年、シアトルのサダコ像の腕が再び折ら

れてしまった (p.118) が、募金運動が展開され、修復された。再び修復されたサダコ像には、定期的に地元子ども達が訪れ、折鶴を献げているという。シュモーに学ぶ会では、シュモーについての紙芝居を作成し、広島市内の保育園や幼稚園に寄贈した (p.120)。また新潟県長岡市の中学生が広島市の平和記念式典に参加し、シュモーハウスにも訪れ平和について学んでいる (p.123)。

6の主要な問いは、シュモー精神とはどのようなもので、どのように広がり続けているのだろうか、である。

以上のように、まず、本書を文章として読み解いた。

## (2) 本書の構造的読解

次に、本書の構造を把握することとした。構造的に読解するとは、問いと答えの関係から、それぞれの問いと答えを構図的に配置し直し、構図に示されている構造を読み解くことである。

第2章第1節で、文章的に読解し、各章のまとめと問いを導き出したが、これはどのような構造にあるのか検討することにする。各章の問いとまとめの要約を整理しておこう。

- 1 シアトルにあるサダコ像とはどのようなものなのか。  
A シアトルのサダコ像はピース・パークにあり、2003年にその腕が切り落とされ、修復のための募金運動が展開された。
- 2 シュモーとはどのような人物なのだろうか。  
A 平和とは行うことを信条にし、戦後にアメリカから広島にやってきて、いろいろな活動をした。
- 3 シュモーはどのような思いでヒロシマの家を建設したのだろうか。  
A 平和への強い思いから、ヒロシマの家をみんなと建設した。
- 4 「ヒロシマの家」から「シュモーハウス」

へとどのように変わったのだろうか。

A シュモーは家の建設だけではなく、お互いの交流を深める場としても作ったので、その名前に変わった。

- 5 シュモーは、どのような生涯を送ったのだろうか。

A 広島だけではなく、長崎、朝鮮、エジプトでも家の建設などいろいろな活動を行った。

- 6 シュモー精神はどのように広がり続けているのだろうか。

A 2012年に再びサダコ像の腕が折られたが、再び募金運動で修復された。そして、シアトルでも広島でもシュモーについて学ばれている。

本書は1から6からなっている。主要な問いとその要約に基づき、整理したものが、図1である。

本書は大きく、1のサダコ像の腕の破損を導入にして、シュモーの活動をまとめた2から5と、シュモー精神を引き継いだ6から成り立っている。シュモーの活動も、ヒロシマの家建設のために広島に来る前、建設中、建設後の三つに分けることができる。

本書は、シュモーの一生の活動を述べ、彼が貫いた人類愛に支えられた平和の精神を理解できるように構成されている。

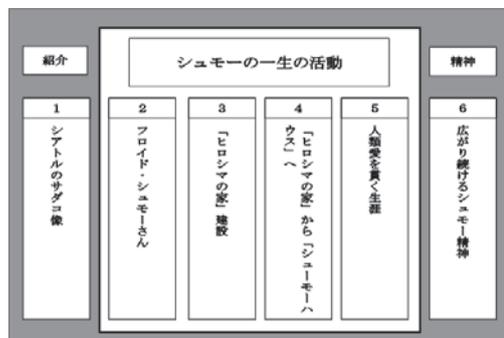


図1 『ヒロシマの家—フロイド＝シュモーと仲間たち—』の構造

※池野作成。

### （３）本書のレトリック的読解

以上を踏まえ、本書をレトリック的な読解をする。レトリック的な読解とは、本書の著者の意図やこれまでの研究との差異を読み取ることである。

シュモーは、広島への原爆投下に対して、悲嘆と怒りを覚え、その日に罪悪を償うために広島に赴き、家を建てる決心をしたと言う。しかし、シュモーはただ家を建てて罪を償おうとしたのではない。年齢、国籍、人種、言葉、宗教が違う者が、様々な違いを受け止め、お互いを理解し合ったうえで協力して家を建てる。シュモーはその過程にこそ平和につながるものがあるという信念をもっていった。それは、シュモーが家を建てる時に必ず掲げていた看板から読み取れる。その看板には次のように記されていた。

HOUSES FOR HIROSHIMA

WORK CAMP PROJECT

1 To build understanding

2 By building houses

3 That there may be peace

シュモーの平和につながる活動は広島に留まらない。同じように原爆の被害を受けた長崎や、朝鮮、エジプトにも赴き、家を建てている。さらに93歳のときにはシアトルにピース・パークを造る。生涯を通して平和のために活動し続けたのである。

本書では広島での活動を中心に述べ、広島に来る前でのアメリカでの活動、広島での活動、広島後の活動を示すことにより、彼がもち続け、活動基盤となった平和への精神を発見させるものになっている。

### 3. 小学校社会科での単元開発

以上のように、本書の読解を行い、教材研究したうえで、小学校社会科で単元開発し、併せて、英語科との協働学習を進めることに

した。社会科単元は、小学校4年の地域学習における歴史的学习「地域の発展に尽くした人々」である。

#### （１）単元の基本構想

広島の復興に大きく貢献しただけでなく、平和のために自ら実践したシュモーの精神に学ぶ価値は非常に大きいと判断し、本書をもとに単元を作ることにした。また、英語科と連携をとり、同時期に英語の授業でもシュモーを取り上げ、両教科で平和について学ぶ学習を実践することにした。ここではまず社会科の単元について述べる。

まず、本書の巻末にあるシュモーの年表(pp.150-157)を参考にして、小学生でも理解できるように年表を作り替えた。それが表1である。

広島でなぜ活動をしたのかを、授業の中で考えさせることにした。

本稿の目的であった、専門科学（研究者）における「真真正な学び」の視点から見れば、本書の構造をそのまま授業に転用することができる。しかしながら、第4学年という発達段階を配慮すると、人間の活動を重要性に並べて学習するよりも、時間順に理解することの方が適している。そのため、詳しく書かれているシュモーの年代順の活動と彼の精神を学ぶような単元を組織した。

また、サダコ像よりも石灯籠を単元の入り口にすることにした。それは、CLIL単元として、英語科との協働学習をするときの共通の題材として「peace（平和）」を選んだからである。

そこで、シュモーの一生の活動内容は図1を活用し、単元構成では、入り口のシアトルのサダコ像を、石灯籠に変えることにした。シアトルにあるサダコ像の腕を折られた事件は、ヒロシマの家建設後のシュモーの行動を追う段階で取り上げた。

以上のように、本書の読解とその構造から、

教材研究と教科横断型単元づくりにおいて学び取ったことは、次の点である。

- ①シュモ어의活動の時間的順序
- ②シュモ어가持ち続けた平和を希求する精神

この2点を社会科単元の基軸に据え、併せて、英語科との協働学習の基本概念をシュモ어가希求し続けた平和の精神に置くことにした。

## (2) 社会科の単元構造

本単元の導入では、児童にとって身近な地域から授業に入ることにした。シュモ어가ヒロシマの家を建てた時、庭の片隅に「祈平和」 「THAT THERE MAY BE PEACE」と彫った石灯籠を置いた。その石灯籠は、本附属小学校から歩いて行ける距離にある。単元の導入部分ではその石灯籠の見学をした。石灯籠に彫られた“PEACE”の文字に着目させることで、英語科との協働がしやすいこと、英語科でも社会科でも子ども達が「平和とは何か」をシュモ어가どのように考えていたのかを考える契機になると考えたからである。

石灯籠の見学から、子ども達がシュモ어가とはどのような人物なのかを調べたくなるように仕組んだうえで、シュモ어의年表を配付した。子ども達は、シュモ어가、原爆を投下した国であるアメリカ人であること、原爆投下に対して大統領に抗議の電報を送っていること、シュモ어가広島に来たのは50代で、決して若くなかったことなどに対して非常に驚いていた。また、この年表は、英語科の西原が同じ内容の英語版を作成し、英語科の授業で活用した。

その後、シュモ어가なぜ広島に来たのか、なぜ家を建てようと思ったのか、どのようにして家を建てたのか、なぜ「シュモ어가住宅」ではなく「平和住宅」にしたのか、なぜシアトルにピース・パークをつくったのか、とシ

ュモ어의活動の順に、子ども達に考えさせていった。授業を進めていくうちに子ども達は、シュモ어가は償いのためだけに広島に来て家を建てたのではなく、平和をずっと考えていたことに気づいた。また、ヒロシマの家の建設を企画したのはシュモ어가であったが、シュモ어의活動に賛同して日本にやって来た3人のアメリカ人、募金という形で家の建設に協力した多くの人々、アメリカ人のシュモ어가が広島に家を建てることを認めた浜井信三（当時の広島市長）、ボランティアとして家の建設に協力した日本の若者たちなど、多くの人々が関わっていることも理解することができた。

単元の後半では「シュモ어가に学ぶ会」の方に学校に来ていただき、シュモ어의平和への思いについて話をしていただいた。また、本校近くの折鶴モニュメントの見学もした。そこには広島の復興を支えた外国人4人の功績が記されているが、その一人がシュモ어가である。本単元でシュモ어의行動を知ったうえで、子ども達に、今の自分にできることは何か考えさせた。年齢や人種に関係なく仲良くする、友達同士・国同士が理解し合う、といった意見が出た。これは本単元で平和について深く考えた結果であろう。

このように、地域から地域へと大きく構成し、その地域の中の一つとしてシュモ어의活動の歴史を組み込んだ。

表2にまとめたように、本書の読解・教材研究をもとに、社会科と英語科で教科横断的に授業を行った。同時期にシュモ어가を学習材に授業をし、同じ内容の年表や同じ写真資料を用い、教科横断型単元を作った。また、どちらの教科も単元の終末は、平和をつくるために自分にできることを考えさせ、平和に対する畏敬の念や、他者と共生する力の育成を図った。

表1 フロイド＝シュモ어의年表

フロイド＝シュモ어 (1895－2001)

いつ	年れい	主なできごと		
1895年		・アメリカで生まれる		
1918年	23才	・第一次世界大戦では良心的兵役拒否。		
1928年	33才	・ワシントン大学で環境問題などを教える		
1945年 しょうわ 昭和20年	50才	・広島に原爆を投下したことに怒って大統領に抗議の電報を送る	・広島・長崎に原爆投下	
1948年 昭和23年	53才	・日本の病院や孤児院用のミルクを送るため、数百頭のヤギを連れて初来日 ・広島に来る(1回目)	・広島市は、平和記念公園の建設を決める 	
1949年 昭和24年	54才	・8月、4000ドルの寄付をもって広島に来る ・10月、皆実町に完成した4戸を広島市に贈る。庭園には、石とうろうがせっちされる		
1950年 昭和25年	55才	・6000ドルの寄付をもって広島に来る ・江波に「ヒロシマの家」を8戸建てる ・浜井広島市長から感謝状が贈られる		
1951年 昭和26年	56才	・アンドリュースさんとブライアントさんらが来日。「ヒロシマの家」1戸とコミュニティハウスを建てる		
1952年 昭和27年	57才	・広島に来る ・江波に2戸、牛田に4戸の「ヒロシマの家」を建てる		
1953年 昭和28年	58才	・広島に来る ・「ヒロシマの家」として「ゲストハウス」を建てる		
1969年 昭和44年	74才	・16年ぶりに広島に来る。江波などを訪問。		
1982年 昭和57年	87才	・日本政府から勲四等瑞宝章を受ける ・皆実町の「ヒロシマの家」老朽化により撤去される。		
1983年 昭和58年	88才	・広島市特別名誉市民となる ・広島市が招待し、平和祈念式に参加。		
1985年 昭和60年	90才	・広島市訪問。		
1988年 昭和63年	93才	・谷本清平和賞を受賞し、授賞式に出席。 これが広島に来た最後		
1989年 平成元年	94才	・谷本清平和賞の賞金をもとに、シアトルに広島原爆瓦などを配置した「ピースパーク」を建設		
2001年 平成13年	105才	・老衰のため死去		

※本表は、シュモ어に学ぶ会編(2014)より沖西作成。

#### 4. 小学校英語科での単元開発

##### (1) 単元 Striving for a Better World

英語科ではシュモーに学ぶ会(2014)を教材化し、CLIL型単元として授業開発することにした。単元は「Striving for a Better World～The Peace Message～」である。本章では、教材化研究の過程において、英語科を中心にしたCLIL型単元づくりへの過程をどのように進めたのかを明らかにする。英語科においても社会科同様、本単元で、本書のねらいを探究するように構成を行った。

単元構成のねらいと実際の授業の流れについて説明する。前半では、地元広島の前原爆ドームや平和記念公園等、身近なテーマを例に出しながら、平和の概念を理解するための基礎・基本となる語彙について、導入を図り、定着を目指した。そしてシュモーがどのような人生を送ったのか、家族やボランティア達とどのような活動をしたのかということに焦点を当てて、人物理解を行った。英語科でも子どもたちが「平和とはなにか」をシュモーがどのように考えていたのかを考える契機になると考えたからである。

また、パール作(2007)『ピースブック The Peace Book』という絵本を用いて、学習を進める上で土台となる語彙や英語表現を導入した。ここでのねらいは、英語で理解するための知識・技能を習得することである。第4学年の児童は、まだ英語学習初心者で、十分な語彙が身に付いていない段階であり、文脈や場面から英語表現の意味を推測したり関連付けて考えたりすることが求められる。

単元の中盤では、学校生活における平和について考えさせた。ここでは、実際に英語を使って教師やなかまとやりとりすることが目的である。平和を戦争の対比としてとらえるだけではなく、日常生活において、自分にはどのようなことができるか、また、シュモーの生き方から学べることは何かについて英語でやりとりさせた。シュモーの英語年表(表

3)を作成し、シュモーがどのような人生をたどったかについて、社会科の授業と同時進行で英語による理解を促した。また、シュモーが平和な社会・世界の実現のために、活動したことについて理解を図り、そこから自分達には何ができるか、また、将来どんなことができるようになりたいかについて、英語で考えさせ、意見交換させた。

単元の終末では、ALTや留学生とともに折鶴作りを通して交流させる。単元終末に学習内容の総合的な活用を促す言語活動を設定することによって、児童に明確な目的意識を持たせると同時に、学習項目(フロイド＝シュモーについてや語彙・英語表現)の積み上げだけではなく、学習項目の何を、どのように使用するかを自己決定させ、主体的言語使用者となることを目指した。そこに向かうことは一時間ごとの学習を自己管理していく力を身に付けさせることにもつながると思われる。英語を通して、シュモーの生き方に学び、教師や友だち同士、留学生と意見を交流することで、他者の生き方や気持ちを自分の中に取り込むという視点でまとめを行った。

表2 教科横断型の単元開発

重点項目	ねらい	社会科	時間	英語科	ねらい	重点項目
共生を創る態度	灯籠からシュモーさんに 関心をもつ。	灯籠の写真を見て、疑問に思った ことを話し合う。	1	灯籠や折鶴の写真を見て、どんな ことが英語で記されているか話し 合う。	絵本や実物に書かれて いる英語でどのように 言えばよいのかを知 る。	知識・技能
		灯籠を見学して疑問に思ったこと を話し合う。	2	平和に関する絵や写真を見て、ど んなメッセージが込められてい るか知り、英語で表現する。		
知識・技能、思考力・表現力	シュモーさんの行動を理解するとともに 彼の思いについて思考する。	シュモーさんの年表から、詳しく 調べたいことを話し合う。	3	Peace Book の読み聞かせを聞き、 どんなメッセージが込められてい るかを調べる。	シュモーさんが行っ た活動や絵本のメッ セージを英語で理解し、自分にはど んなことができるか考 え、表現する。	思考力・表現力
		家を建てるまでのシュモーさんの 活動について調べ、分かったこと や考えたことを話し合う。	4	シュモーさんの生い立ちや行っ た活動について、英語で聞き、理 解する。また、人物紹介の仕方を 知る。		
		家を建設するときの苦労について 調べ、考えたことを話し合う。	5	シュモーさんの生い立ちや行っ た活動について、英語年表から情 報を読み取る。		
		平和住宅という名前にし、灯籠を 置いた時のシュモーさんの思いを 考える。	6	今の自分にできることや将来で できるようになりたいことを考 え、ピース・メッセージを書く。		
		家を建てた後のシュモーさんの活 動を調べ、分かったことや考 えたことを話し合う。	7	友達のピース・メッセージを聞 き、感想を話し合う。		
共生を創る態度	シュモーさんの生き方から、自分 たちにできることを考える。	8「シュモーに学ぶ会」の方に話を聴く。			留学生と折鶴つくりを通じた交流を行 うことにより、これまで に知り得た情報や平和 への自分の思いを工夫 して伝えようとする。	共生を創る態度
		折鶴モニュメントを見学して考 えたことを話し合う。	9	折鶴と一緒に作ることを通して、 留学生と交流する。		
		広島復興とこれからの発展につ いて考えたことを話し合う。 折鶴をどうするか考える。	10	これからの学校・家庭生活の中 で、自分が頑張ることをメッ セージ・カードに書く。		

※重点項目とは、3つの資質・能力のうち特に重点を置く項目のことをさす。  
 は、それぞれの教科でシュモーさんについて学習する時間。

※沖西・西原作成。

表3 シュモ어의英語年表

Floyd Wilfred Schmoe (1895-2001)

Year	Age		
1895	0	▪ Schmoe was born in America.	
1928	33	▪ Schmoe was a teacher of forest.	
1945 (S20)	50	▪ He was angry about the Atomic Bomb and appealed to the President in America.	▪ Atomic Bomb in Hiroshima and Nagasaki
1948 (S23)	53	▪ He came to Japan with hundreds of goats. He sent a lot of milk to the babies in hospitals. ▪ He came to Hiroshima. (For the first time)	▪ Start building the Peace Memorial Park in Hiroshima
1949 (S24)	54	▪ He came to Hiroshima with 4,000 dollars. ▪ He built 4 houses and a garden with a lantern in Hiroshima.	
1950 (S25)	55	▪ He came to Hiroshima with 6,000 dollars. ▪ He built 8 houses of Hiroshima in Eba.	▪ Start the Korean War
1951 (S26)	56	▪ He came to Hiroshima with his friends, Andrews, and Brian. ▪ He built a house of Hiroshima and a community house.	
1952 (S27)	57	▪ He came to Hiroshima. ▪ He built 2 houses of Hiroshima in Eba and 4 houses in Ushita.	
1953 (S28)	58	▪ He came to Hiroshima. ▪ He built a guest house in Hiroshima.	▪ Stop the Korean War.
1969 (S44)	74	▪ He came to Hiroshima. He went to Eba.	
1983 (S58)	88	▪ He came to Hiroshima and joined the “Peace Memorial Ceremony.”	
1985 (S60)	90	▪ He came to Hiroshima.	
1988 (S63)	93	▪ He came to Hiroshima.	
1989 (H1)	94	▪ He built “The Peace Park” in Seattle.	
2001 (H13)	105	▪ He died.	

※本表は、シュモ어に学ぶ会編（2014）より西原作成。

このように、英語を学ぶとともに、シュモーターがどんなことを考えて一生涯活動したのかを探究したのかなど、英語の表現に含まれている表現者の精神、発話者の気持ちをくみ取るようにし、社会科のねらいと同様、その人の変わらない精神を見つけるように構成することとした。

## (2) CLIL 型単元での教材研究

英語科では、児童の思考力・判断力・表現力の育成のために、CLIL 型単元を導入している。他教科・領域での既習内容や学校行事等について、英語を通して学ぶことによって、特に思考力・判断力・表現力を育成することをめざす単元であり、本校が指導に最も力を注いでいる単元である。CLIL とは、単なる言語学習ではなく、学習言語と教科内容を同時に学ばせながら、4つの原理（内容・言語・思考・協同）を組み合わせる教授法のひとつで、近年ヨーロッパを中心に広く実践研究されている。CLIL の 4 つの C とは、内容（Content）、言語（Communication）、思考（Cognition）、文化／協同学習（Culture/Community）である。CLIL 型単元では、英語そのものだけを学ぶのではなく、英語で何かを学ぶことで、教室における最も自然な言語使用の機会を生み出すことが可能となる。また、学習者の既存の知識・知的好奇心・認知力に働きかけることで学習への動機づけを高めることが可能となる。

CLIL 型単元においては、教科（ここでは英語）について学ぶ授業ではなく、「教科する授業」につながると考えられる（石井，2015，p.39）。これまで、コミュニケーション・ツールとして英語を学習してきたが、本単元では、英語を通してシュモーターの考え方や人生について触れたり、自分には平和な社会の実現のために、何ができるかを考えたりするなど言語が伝える内容の側面にクローズアップした。また、教科指導を構想することの必要性とし

て、「知識・技能が実生活で生かされている場面やその領域の専門家が知を探究する過程を追体験し、「教科の本質とともに深め合う授業」（石井，2015，p.39）であり、その分野ならではの知的な発見や創造の面白さを子どもが経験できる授業の重要性が述べられている。

思考力・判断力・表現力を育成する上で、言語習得は、教科の課題を追究する手段であると同時に目標でもある。また、各教科などには、その本質を追究するにふさわしい、その教科等ならではの思考過程というものがある。こうした「手段かつ目標」である教科等の本質的な思考過程に適した形で対話を授業の中に位置付け、豊かに深く追究する中で、その教科等ならではの内容知や方法知を身に付けることを重視する。

思考する必然性のある課題を教科等特有の見方や考え方を生かして解決していく学習活動を通して、知を発見したり、想像したりする楽しさを味わいながら資質・能力を育てる。

平和学習は児童にとっては大きな意味をもつ。かつての戦争相手国で使われている英語を学ぶ児童を前に、英語教育にできることは何だろうか。英語をツールとして、世界の人々とやりとりし、つながる楽しさを伝えることだと考えている。体験的に理解させることで、対話は表面的なものではなく、内容の豊かさによってより豊かになるものであることを実感できる機会となりうる。伝えたい内容を英語で表現するためには、授業で予定されている目標語彙や文法を超えるものである。難しいが、今後も少しずつ工夫を重ねていきたい。

## 5. 研究の成果

本稿の研究の成果として、以下の3点を挙げる事ができよう。

まず1点目は、研究者の論文や著書そのまま教授するのではなく、研究者＝著者の学びの過程や構造を解明し、それを踏まえた上で教材研究を進めたことである。小学校の段

階であっても、教材研究を行う際にこのような段階を追うことは非常に重要であることが認識できた。

2点目は、研究者＝著者の学びの過程や論文（著書）の構造を明らかにした上で、小学校社会科と英語科において、教科横断型単元を開発したことである。児童に身につけさせたい教科独自の力もあるが、教科相互で連携を図ることで多面的・総合的な力も育成できると考え、教科横断型単元開発に取り組んだ。

3点目は、協働型単元構成をしたこと、特に「シュモーのもち続けた精神」を探すという、同一の終末をねらいにして協働がはっきりと単元構成にでてくるようにしたことである。教科の枠を超えて、平和な世の中にするために自分達には何ができるか、また、将来どんなことができるようになりたいかを考えさせたことは、意義のあることだと捉えている。

## 6. 結語

教師は、各教科の教材研究を専門科学（研究）者が書いた論文や著書を読解することで教材研究を進めている。論文などを読解する際、単なる文章の読解に終始するのではなく、論文の内容を整理し、さらに構造を解明することで、著者の研究過程と研究目的を明らかにし、児童の「学び」への大きな手がかりとなりうる。さらに、研究者の「真正な学び」の過程や構造を解明し、小学校社会科・英語科で教科横断的な単元を開発し、実践検証できることを明らかにした。

本書を読解し教材研究したことをもとに、教科横断型単元を開発・授業実践することで、社会科では身近な地域の中にもグローバル化があることを理解させることに活用できた。英語科では、シュモーのことばを理解し、発信することで、ことばをつかう人の思考や人格に学びながら、言語を使用することの大切さについて再認識できた。今後ますます世界

の人々と共存するグローバルな環境の中で、英語はお互いの考えを理解し、より良い人間関係構築のための重要な手段となるであろう。

両教科を通してシュモーがもち続けた平和の精神を学ばせることができた。社会科と英語科で実践したことが相乗効果となり、単一教科で取り組むよりも、より深く学ばせることができたと考える。

本稿の研究で明らかにしたことは、次の3点にまとめることができる。

- (1) 小学校段階においても、またその教科横断型単元開発でも、論文（著書）読解による研究者の学びの構造理解は教材研究－単元づくりの過程に有効に活用することができる。
- (2) 小学校段階では、単元づくりにおいて、論文（著書）読解で見いだした研究者の学びの構造は応用・活用できるが、発達段階、学習環境に応じて別のものに変えた方がよい場合がある。教科横断型単元では2つの教科における学習双方に有効な材料を見いだすことが戦略上、大切である。
- (3) 教材研究としての論文（著書）読解において重要なことは、
  - 1) その論文（著書）の構成に示されている構造の発見である。
  - 2) その構造が示す中心観念である。そして、その中心観念が単元づくりの中心に活用できるかどうかを検討することである。
  - 3) 小学校の教材研究と単元づくりでは、発達段階や子どもの学習における適切性である。

今後の課題は、同一専門科学（研究）者の論文を比較し、研究過程や論文の構造の違いを研究することで、専門科学（研究）者の、活字になっていない部分の背景、研究過程やねらいを読み取ることであろう。また、社会科・英語科以外の教科とも、教科横断型単元開発を行うことで、教材研究における論文・

著書読解を通じた「真正な学び」の実践・検証を行っていききたい。

## 註

- 1) シュモーに学ぶ会編 (2014) 『ヒロシマの家ーフロイド＝シュモーと仲間たちー』からの引用は頁のみ, (p.6) のように示す。

## 参考文献

- 池野範男 (2016) 「真正な歴史研究実践ー白須淨眞著『大谷探検隊研究の新たな地平』を事例に」 荒川正晴・柴田幹夫編著『シルクロードと近代日本の邂逅』 勉誠出版, pp.3-21。
- 池野範男・福井駿 (2015) 「「真正な実践」研究入門ー価値 (哲学) 領域の読解を事例にして」『学習システム研究』(2), pp.1-10。
- 石井英真 (2015) 『今求められる学力と学びとは』 日本標準ブックレット。
- パール, T. 作 (堀尾輝久訳) (2007) 『ピースブック The Peace Book』 童心社。
- ソーヤー, R. K. 編 (森敏昭・秋田喜代美監訳) (2009) 『学習科学ハンドブック』 培風館。
- シュモーに学ぶ会編 (2014) 『ヒロシマの家ーフロイド＝シュモーと仲間たちー』 シュモーさんの『ヒロシマの家』を語りつぐ会 (自費出版)。

## 著者

沖西 啓子 広島大学附属小学校  
 西原 美幸 広島大学附属小学校  
 深澤 清治 広島大学大学院教育学研究科  
 池野 範男 広島大学大学院教育学研究科

一部内容に重複 (p. 72) と誤り (p. 74・p. 75) があり、刊行物を訂正しました。

学習システム促進研究センター  
 元センター長 池野 範男  
 2017年6月30日